◆かっぱ民話シリーズ⑨◆

河童の名工 甚五郎

かっぱのめいこう　じんごろう

作:近藤せいけん

相模のかっぱ村「三流」、人間界には見えない、かっぱ村が相模の国、相模川、中津川、小鮎川の三つの合わさる所に、かっぱ村「三流」、悠々とした霊峰大山のふもと,肥沃（ひよく）な大地、三つの川の清流にあります。人間界には見えない、まぼろしの別天地です。
かっぱ村には名人、上手、といわれる、かっぱが住んでいます。なかでも、「天狗様の木彫り」「かっぱの木彫り」にかけては名人といわれている、名工がおります。
その名は「甚五郎（じんごろう）」
「鮎の木彫り」「鯉の木彫り」「たぬきの木彫り」などは、すばらしいものがあります。
名工　甚五郎は天気の良い日は、三つの川のそばで木彫りに使える木を探しにいきます。
クス、ホウ、ベニ松、ヒノキ、サクラを求めて今日も朝早くから、かっぱ舟をあやつり、相模川の上流に上がっていました。
甚五郎（じんごろう)は人に化けるときは、いつも年寄りのきこりに化けます。一本のヒノキに目がとまりました。

「ほう～これはよい木だ、おれをよんでいる」
「おれに彫ってくれ、彫ってくれ、まねいている」
「さて、この木は、おれ一人では手にあまる。むりだ」
「どうするか～どうするか～」
「そうだ、村人に頼もう」
甚五郎は三田村の農家を訪ねた。
「となり村のきこりじゃが、木を一本切るのを手伝うてほしい」
「どこの木じゃ？」
「あそこの、川ぞいの山のヒノキじゃ」
どれ、どれといいながら、家の外に出た。
「あんれ～、あれは、じっちゃまの山だ」
「じっちゃまに聞いてみないとなぁ～」
「じっちゃま！じっちゃま！お客さまじゃぁ～」
じっちゃまが杖をついて、戸口に出てきた。
「なんじゃぁ？」
「じっちゃま、この白ひげのおとしよりが川ぞいのヒノキを欲しいといっていなさる」
「おれに木を切るのを手伝ってくれとなぁ」
じっちゃまはうさんくさそうに、白ひげをみつめた。
「売ってやらんこともないが、あのヒノキは上等でなぁ、ちっと値がはるぞ～」
「え、ヒノキは売り物なのか？」
「おまえ様～あのヒノキをただで、切ろうとしているのかい？」
「金は持っていない」
「え～え～驚いた」
「どこの人だぃ～」
「あんまり見かけないお人だが・・・」
「あのヒノキがおれをよんでいるのじゃ」
「切ってくれ！切ってくれ！彫りあげて、魂をふきこんでくれ！」と叫んでいるのじゃ。
「わぁぁ　おったまげた！」
「木の声が聞こえるのか？」
「ああ、聞こえる」

「そうか、たいしたお人じゃ」
「名はなんともうす？」
「木彫り士　甚五郎　」
「はて？　どこかで、聞いたお名じゃ」
　じっちゃまも村人も顔を見合わせて、困った表情をした。
「甚五郎さん、このヒノキも丹精こめて育てあげた木じゃ。ただでは譲れない」
「そうか・・・」
すると甚五郎は腰につけた、袋から「真珠玉」をとりだした。
「どうじゃ、この真珠玉でどうじゃ！」
「わぁ！何とすばらしい真珠玉じゃ！」
「この袋の中に沢山入っている、袋ごとあげる」
「これで売ってくれ～」
「わぁ～こんないっぱい、驚いた」
「解った！売ろう。そして木の切だしも手伝う」
こうして村人とかっぱの甚五郎のヒノキ売買が成立した。
そして木は無事切りたおされた。相模川に浮かんだ。
「甚五郎どん、このヒノキを彫りあげたら、一体、村にくれないか」
「大事にするから覚えていてほしい」
「あい解った、世話になりもうした。それではさらばでござる」
かっぱの甚五郎は大きなヒノキの丸太の上に乗り、かっぱの里「三流」に帰っていった。